

バーンウェルト

DIE Bahnwejt

ビジュアル仕様

平沢 健一 桑田 浩之

平成4年 2月 23日

原作・平沢	'91 8/20
オープニング・桑田	'92 1/30
ビジュアル・平沢	'92 2/10
エンディング・桑田	'92 2/ 3

DIE Bahnwejt のシナリオ仕様に基づき、オープニング、ビジュアル、エンディングの作成仕様を示す。

1 デザイン仕様

1.1 画像セル仕様

画面解像度 512×512

画像セルサイズ

384×384 ぐらいにしとしましょう。ただしスクロールする場合などは、しかたがないので 512×512 を目いっぱい使えることとします。

色数

1セルあたり 16 色。

画像構成

一つのシーンではセルを最大 5 枚まで重ね合わせが可能。(3 枚までが望ましい)

アニメーション

画像構成で重ね合わせるセルの内、最上位にいる一枚だけが目ばちなどのアニメーション可能。他のセルはスクロールのみ。

1.2 ビジュアル構成

ディスク容量の関係上、可能な部分は静止画で表現する。会話シーンではできるだけトークで処理、あるいはアニメーションする部分を小さくする。

Opening

1. プロローグ
2. “Lar Keior” の出現 (3~4 枚)
3. タイトル
4. カノールとラーニアの会話 (3~4 枚)
5. ゲーリー教授登場 (2~3 枚)
6. “Lar Keior” への突入 (2~3 枚)
7. 動力炉ルームにて (4~5 枚)

8. ゲーリー教授との戦闘 (3~4 枚)
9. “Lar Keior” 時空転移 (5~6 枚)
10. “Verle a Zohl” にて (4~5 枚)

Visual 1 — 海底都市 “Ferioul” からの脱出 —

1. シャトル搭乗 (5~6 枚)
2. シャトル発進のため、残るエルテノ (3~4 枚)
3. 天空都市を目指すシャトル (5~6 枚)

Visual 2 — 天空都市 “Rexor” マザーコンピュータールーム —

1. ヴェレアトール崩壊 (3~4 枚)
2. ヴェルビアスを捨てて (1~2 枚)
3. ゲーリー教授再登場 (5~6 枚)
4. ヴェルビアス発動 (6~7 枚)
5. 海底都市 “Ferioul” 消滅 (4~5 枚)

Visual 3 — エルテノの死、そしてゲーリー教授との最終対決 —

1. エルテノとの戦い (3~4 枚)
2. 倒れるエルテノ (5~6 枚)
3. ヴェルビアス暴走 (2~3 枚)
4. エルテノの死 (7~8 枚)
5. 最終対決 (4~5 枚)

Ending

1. ゲーリー教授の最期 (1~2 枚)
2. ラーカイアの自爆セット (3~4 枚)
3. ヴェルテバルムによる脱出 (1~2 枚)
4. 天空都市 Rexor の消滅 (4~5 枚)
5. 回想カット & スタッフロール (2~3 枚)

Opening

プロローグ

背景を宇宙空間にして、プロローグをそのままテロップでスクロールさせる。次の **Lar Keior の出現**につなげる。

Lar Keior の出現

背景の宇宙空間から“Lar Keior”を出現させる。出現の特殊効果は画像処理でもなんでもやるっきゃない。(絵で描いてくれればいいけど…)

出現した“Lar Keior”はカメラワークで転回させ(なーんてできるか!!)、“Lar Keior”が前方の惑星に向かっていくような表現をする。

タイトル

ここでタイトル表示。

カノールとラーニアの会話

場面を変える。ここはカノールの事務所というかアジトというか。で、新聞かなんかを読みながらコーヒーを飲んでいるカノール。

そこへラーニアが入って来る。

ラーニア 「ねえ、スクリーンでニュースをやってるわよ」

カノール 「ああ、見に行こう」

スクリーンに写し出される“Lar Keior”。

アナウンサー 「飛来した巨大飛行物体は依然として沈黙を続けており、議会では攻撃的意図を持って飛来したものではないとしながらも、軍部による監視を今後とも継続し、応答のない場合は調査隊を派遣する方向で検討を進めております。また、有識者の中にはこれを古代大戦期文明の遺跡であるという見方をする者もあり、貴重な遺跡であると同時に未知数の攻撃能力の危険を指摘する声も出始めております。繰り返します。巨大飛行物体の全長は 4km。アルガスラル海上空 3800m を非常にゆっくりとした速度で極点方向に向けて航行を…」

ラーニア 「なにか面白いものが見つかりそうね」

カノール 「そうだな。議会の調査隊が派遣される前に行動しなきゃ。今夜中にやつに乗り込むことにしよう」

ラーニア 「きゃっ♡ 財宝とか宝石とか積んでいないかしら」

カノール (沈黙) … 「ないと思うけど…」

スクリーンの“Lar Keior”。そのままゲーリー教授の見つめるスクリーンへ。

ゲーリー教授登場

“Lar Keior” を見つめるゲーリー教授。ここはゲーリー教授の秘密研究所である。

コンピュータ 「すなわち、古代大戦期文明によって創造された時空都市、“Verle a Zohll” より飛来しせし船。確率 76%」

ゲーリー教授 「時空転移を実現する搬送波はいかなるエネルギー形態を有するか」

コンピュータ 「不明」

ゲーリー教授 「当該船の駆動機関は“Verle a Zohll” との物理的相互作用を必要とするか」

コンピュータ 「肯定的」

ゲーリー教授 「… バルキーニュ!」

ゲーリー教授の従僕ロボット「**バルキーニュ**」が現われる。

バルキーニュ 「ここに。Professor」

ゲーリー教授 「あの船を捕獲、調査する。支度をせよ」

バルキーニュ 「了解致しました。Professor」

Lar Keior への突入

闇の中、前方に浮かぶ“Lar Keior”。カノール達の乗る飛行メカがスクロールアップしてくる。

カノール 「クローキング・デバイス作動よし」

ラーニア 「ねえ、どっから中に入るつもり?」

カノール 「軍部の監視に見つからないようにしなけりゃ。艦底の排气ダクトからでも潜り込むか」

⋮

カノール 「よし! GO!」

動力炉ルームにて

ゆっくりと明滅する動力炉。動力ホールの周囲は暗く、かなり荒れ果てている。破壊された機器はないが、汚れ散らかっている¹。そのなか

¹修理をするものはいても、整備するものはいないからである

で漆黒の金属版が動力炉の明滅と共鳴している。ドアが開き、カノール達が入って来る。

金属版を手にとるカノール。一瞬金属版がきらめき、年老いた声がどこからともなくカノール達に語りかけて来る。

声 「“Lar Keior” へ来たりし者は久しい」

カノール 「誰だ。どこにいる？」

ラーニア 「この金属版よ」

カノール 「“Lar Keior”? この船のことか？」

声 「“Lar Keior” は “Verle a Zohll” よりい出て、“Verle a Zohll” に帰る」

ラーニア 「“Verle a Zohll” ですって？ それって伝説の都市のことじゃない？ やっぱこれは古代文明の遺跡なのね」

カノール 「この船は時空を越えることができるのか」

声 「“Verl Bious” の力」

カノール 「“Verl Bious” とは？ この船の動力源なのか」

声 「“Verle a Zohll” を支える “Verl Bious” の力」

教授との戦闘

その時、遠方で爆発音がし、“Lar Keior” がわずかに振動する。“Lar Keior” の外ではロボット艦隊を率いたゲーリー教授が軍の戦闘艦を攻撃、破壊している。

ゲーリー教授 「軍の全艦艇につぐ。我が進路を妨害するものは統べて破壊する」

バルキーニュ 「妨害しなくても破壊しています。 Professor」

“Lar Keior” に強引に接触するゲーリー教授のメカ。

船内ではカノール達が自分たちのメカに向けて脱出を開始した。そこへ正面からゲーリー教授がロボットを引き連れて通路を歩いて来る。

カノール 「ゲーリー教授!!」

ゲーリー教授 「ふん、ねずみどもか… む…その手に持っているものは何だ？」

カノール 「…」

ゲーリー教授 「おとなしくそれを渡せ! この船はすでに私のものだ」

ロボットたちの銃口が威嚇するように持ち上がる。

Lar Keior 時空転移

“Lar Keior”の制御ルームでは、自動装置がはるかな昔にプログラミングされたシーケンスを黙々と実行している。やがて一つの装置が出力を表示する。

測定誤差 ±0.000 方程式算出完了

突如として制御装置は眠りから覚めたように次々と活性化していく。動力炉も明滅をやめ、白く輝きはじめる。コンソールにはめまぐるしく情報があふれ、航法コンピュータらしきものが航路のプロットを始めている。

そしてカウントダウンが始まる。

動力音が高まり、通路は急に暗さを増す。

ゲーリー教授 「…何事だ?」

その一瞬の間を付いてカノール達は横の通路に飛び込む。再び走りだすカノール達。ようやく自分たちのメカにたどりつき、発進準備も整わぬまま“Lar Keior”から離れる。しかし、同時に“Lar Keior”のカウントダウンも終了する。

一瞬にして“Lar Keior”船内の全てが凍り付いたように動きを停止する。外からは“Lar Keior”の周囲がゆがみ、黒い球体で包まれ消えていく様子が描かれる。

時空間の揺らぎの中を航行する“Lar Keior”(こいつは無理かな)。船内の時間は全て止まったように凍り付いている。

Verle a Zohll

“Verle a Zohll”に出現する“Lar Keior”。時間の呪縛から解き放たれたカノール達のメカは、しかし転移時の空間のゆがみによって変調をきたし、エンジンを爆発させて墜落していく。

メカの中で気がつくカノールとラーニア。

ラーニア 「ここは…どこなの!？」

カノール 「“Verle a Zohll”なのか!? おい! 答えろ!!」

漆黒の金属版はただ光り輝くばかりである。

Visual 1 海底都市 “Ferioul” からの脱出

シャトル搭乗

海底都市の中央タワーの崩壊が進む中、エネルギーを注入されたシャトルに乗り込むカノール。しかし、エルテノは搭乗ハッチをロックしてしまう。

(ここまでは、キャラ劇 & トークで処理した方がいいでしょう)

(画面を斜めに2分割して、カノールとエルテノを同時に描くなどで、二人の表情を同時にみせたいですね)

カノール 「何をするんだ。エルテノ!」

エルテノ 「私はここに残らなければなりません」

カノール 「ばかな! 中央タワーはもうじき崩れ落ちるぞ!」

エルテノ 「現在シャトルの発進システムは、手動でしか動かせません。私が発進の操作をいたします。さあ! シートについてベルトを装着して下さい!」

激しい振動の中、シャトルに架かる橋が徐々に崩れていく。カノールに背を向け、崩壊する橋の上を制御ルームに向かって走るエルテノ。

そして、エルテノは制御ルームのコンソールの前に立つ。

シャトル発進のため、残るエルテノ

コンソールに向かい発進操作をしながらマイクで、カノールに話しかけるエルテノ。

エルテノ 「シャトル発進ゲートオープン。到着目標設定… 天空都市 “Rexor”」

カノール 「エルテノ! 二人で脱出できる方法を探すんだ!」

エルテノ 「タワーの崩壊が進んで、シャトルの発射が困難になり始めています。他の方法を探す時間はありません。緊急発進用ブースター… スタンバイOK。あなたの生命を守る事、それが私の最優先のプログラムです。カウントダウン、10、9…」

カノール 「エルテノー!」

絶叫するカノール。

天空都市を目指すシャトル

海底都市の中央タワーから、シャトルが轟音とともに飛び立ち、空高く消えていく。

シャトルは成層圏まで上昇し、ブースターを切り放す。やがて、銀色の巨大な球体が前方に見えてくる。

それこそ天空の孤島、**天空都市レクサー**であった。天空都市は球形の外殻の上部を破壊された状態にあり、そこから内部のビル群などの都市の一部の姿をかいま見る事ができる。天空都市とは、その球体の中に一つの都市を取り込んだものだった。

シャトルは壊れかけた侵入路から天空都市に入り、都市にある飛行場に着陸する。

Visual 2 天空都市“Rexor” マザーコンピュータルーム

ヴェレアトール崩壊

彼らの前に一万年前のヴェレアトールのホログラム映像が浮かび上がった。

神秘の魔力と超科学技術に支えられ、栄華を極めたヴェレアトールの人類は、二つの勢力に分裂し争っていた。

彼らの持つ時空間を操作する力はその姿を変え、悪魔の兵器となった。ヴェレアトールを創造した力が、兵器となったとき、その力は時空間をねじ曲げ、多くの都市とそこに住む人々を呑み込み、時空間の狭間に消し去った。

しかし、ねじ曲がる時空間の嵐は、とどまることを知らなかった。時空間の狭間に生まれたヴェレアトールそのものが時空間の歪みの影響により崩壊していった。

高くそびえる山脈が流砂のごとく崩れさり、大気はプラズマの嵐となり、海は煮えたぎる熱湯となった。

長い年月によって築き上げられてきた超科学文明ヴェレアトールは数日で崩壊した。

ヴェルビアスを捨てて

カノールの持つ**漆黒の金属板**が輝き、彼らに語りかける年老いた声が聞こえてきた。

ラーニア 「カノール、金属板が!」

カノール 「また輝きはじめた。これはいったい…」

カノールの持つ**漆黒の金属板**が輝き、彼らに語りかける年老いた声が聞こえてきた。

汝らの前に、時空の道を拓く船ラーカイア現われり
 ラーカイアを統べるものは、その深奥に秘められしヴェルビアスの力を得ん
 その力、時空の壁を破り、道を拓く
 その力、世界を創造する。その力、世界を滅ぼす
 偉大なる創造の力は、大いなる破壊の力
 明記せよ
 ラーカイアは未来を拓く光の力、ラーカイアは破滅をもたらす闇の力

しばし、沈黙する二人。

そして、マザーコンピュータから無機的な合成音声がかえってくる。

コンピュータ 「ヴェルビウス発動準備 OK。最終ロック解除操作の受付中です。解除キーをセットしてください」

ラーニア 「解除キー？」

オーパー 「カノールの持つ金属板のことだよ。おまえら、そんな事も知らずにここまでやってきたのか」

ラーニア 「しょうがないでしょ。私たちだって好きでこんな所に来たんじゃないんだから」

カノール 「…」

考え込むカノール。やがて、ずっと黙りこくっていたカノールが突然言い出した。

カノール 「帰ろう、ラーニア！」

ラーニア 「え、なに、突然…」

カノール 「このまま何もせずに、そこのヴェルテバルムで俺達の世界に帰ろうってことさ」

ラーニア 「でもヴェルビウスはどうするの」

カノール 「俺達はトレジャーハンターさ。世界を創造する力も、世界を滅ぼす力もいない」

ラーニア 「そうね…、そうだよね！」

カノール 「ああ、今回のハンティングは成果無し。それでいいさ」

オーパー 「ふーん、おまえら人間も少しは分別つてもんがあるみたいだな。ま、ヴェルビウスは人間にはちいつとばかし、早すぎるつてもんさ」

カノール 「言ってくれるぜ。このポンコツ」

オーパー 「人間は弱い生き物だ。いつの時代でも力を必要とし、力を求める。だが力を得た人間は必ずそれを正義と勘違いするのだ」

ラーニア 「あーあ、でも宝石のカケラもなあーんにも手に入らなかったなんて残念ね」

オーパー 「女が強欲ってのはどの世界でも不変の法則だな」

カノール 「ははは、ちがいない」

ラーニア 「なんですってー、こら二人とも！」

三人(?) の声は次第に笑い声になっていく。

ゲーリー教授再登場

笑い声が響く中、突然背後で爆発が起きた。

二人は爆発の衝撃で吹き飛ばされ、気を失い倒れてしまう。薄れいく意識の中で、カノールは煙の中から現れた男を見た。爆煙の中から現れた男は、死んだと思っていたゲーリー教授だった。ゲーリー教授は多くのロボットやアンドロイドを従えていた。ゲーリー教授は**漆黒の金属板**をカノールから取り上げる。

ゲーリー教授 「ついにヴェルビアスは我が手中にあり！」

ゲーリー教授は**漆黒の金属板**をマザーコンピュータにセットする。

コンピュータ 「解除キーセット確認。最終ロックを解除します。“Lar Keior” 転移ポイント設定。空間転移誘導波発信」

ゲーリー教授 「ふふふ、一万年の時を超え、天空都市にラーカイアが帰還する」

ヴェルビアス発動

やがて、天空都市全体が振動し天空都市の下部が開く。そこから地上に向かって光がほとぼしる。天空都市から放たれる光は地上に達する前にはじけ、時空の彼方より時空船ラーカイアを呼び寄せた。

突如として現れたラーカイアはそのまま上昇し天空都市の下部に吸い込まれていく。

コンピュータ 「ラーカイアドッキング完了。情報伝達ライン接続。動力ライン接続。ラーカイアからのエネルギー注入開始。天空都市“Rexor”の制御システムはラーカイアに移管されます。以後、天空都市“Rexor”の全機能はラーカイア内部ヴェルビアス制御ホールにて集中管理されます」

そしてコンピュータの無感情な声が告げる。

コンピュータ 「ヴェルビアス発動確認いたしました」

ゲーリー教授 「天空都市を支える巨大動力炉、それがラーカイア！ 今こそ、その内部に秘められし超時空エネルギーヴェルビアスが発動される。天空都市は時空間を超え、愚かなる大衆の頭上に君臨するゲーリー要塞となるのだ！ … バルキーニュ！」

バルキーニュ 「ここに。Professor」

ゲーリー教授 「これよりラーカイア内部ヴェルビラス制御ホールに移る。お前はラーカイアのコントロール装置を掌握するのだ」
バルキーニュ 「了解致しました。Professor」

教授は哄笑しながら、コンピュータールームからラーカイアにむかうエレベータに乗り込んでいく。

やがて、天空都市レクサー全体に光がともり始め、天空都市は本来の機能を回復する。時空間をさまよっていたラーカイアこそが、天空都市の巨大な動力炉だった。天空都市にその巨大な動力炉としてラーカイアが戻った事により、時空間を自在に操る力が甦った。

海底都市 “Ferioul” 消滅

ラーカイア内部のヴェルビラス制御ホールに乗り込んだ教授は、その力を試すために、海底都市フェリオールを時空の狭間に消し去る。

ゲーリー教授 「バルキーニュ、天空都市の状態及び、ヴェルビラスの稼働状況を報告せい」

バルキーニュ 「天空都市外殻 22% 損傷、情報伝達ライン 8% 切断、動力ライン 15% 切断。時空間転移には支障なし」

ゲーリー教授 「時空間転移にはいつ入れるのだ」

バルキーニュ 「現在、ヴェルビラスのエネルギー変換率 70%。時空間転移に必要なとされるエネルギー蓄積におよそ 4500 秒必要と推定されます。Professor」

ゲーリー教授 「よろしい。時空間転移の前にヴェルビラスの兵器としての力を確認する。攻撃目標は海底都市 “Ferioul”！」

バルキーニュ 「了解致しました。Professor」

その頃、マザーコンピュータールームでは、オーパーの声によって二人が意識を取り戻しつつあった。

オーパー 「起きろ。起きるんだ! 二人とも!」

カノール 「く、くそ! ゲーリーの野郎が生きていやがったとは…大丈夫かラーニア」

ラーニア 「え、ええ、なんとか…カノール、あれは!」

ラーニアの指さしたディスプレイ上には、崩壊していく海底都市の姿があった。海底都市を不意に黒い球体が包み込み、その内部で海底都市が崩壊していく。やがて、黒い球体は急速に収縮し、後には何も残らなかった。

オーパー 「あれがヴェルビアスの力を、悪用した見本だな」

ラーニア 「あのゲーリー教授が、あの力を使ってやる事はたぶん…
世界征服でしょうね」

カノール 「世界征服、そんな事はどうでもいい。俺には関係ない。
だが、奴にはでっかい借りがあるんだ。それをまとめて返
してやる! 行くぞ、ラーニア、オーパー!」

ラーニア& オーパー 「OK!」

三人(?)は、教授がヴェルビアスの力を操ることを阻止するために、
ラーカイアに乗り込む。

Visual 3 エルテノの死、そしてゲーリー教授との最終対決

エルテノとの戦い

三人の行く手を1体のパワードスーツが遮った。三人の前に立ちほだかったのは、かつてのパートナー、エルテノだった。パワードスーツを装着したエルテノは、無表情で瞳の色を失っていた。

カノール 「エルテノ!？」

エルテノ 「…」

エルテノは無言で顔の部分を覆うバイザーをおろし、三人に襲いかかる。

カノール 「どうしたんだ! エルテノ!」

オーパー 「何を言っても無駄だ。あのアンドロイドは人工思考回路、感情回路を凍結されている戦闘マシンだ」

カノール 「その凍結機構はどこにあるんだ」

オーパー 「おそらく、スーツのヘルメット部分。だが、相手は容赦してくれないぞ。凍結機構だけを狙うのは不利だ!」

カノール 「承知の上だ! やってみせる!」

カノール達は、不利な戦いへ突入していく。

(戦闘シーンはゲームに戻る。)

倒れるエルテノ

ついに顔を覆うバイザーが砕け、エルテノは倒れる。人工思考回路、感情回路を凍結していた機構が破壊され、エルテノの眼に意志の光が戻る。傷ついたエルテノを助け上げるカノール。

カノール 「エルテノ!」

エルテノ 「…カノール?」

カノール 「エルテノ、元に戻ったんだな!？」

エルテノ 「申し訳ありません。私はあなたに奉仕する立場にありながら、逆に刃を向けてしまいました。この罪は死に値します」

カノール 「バカな事を言うな! 俺は君を召使いのように思ってなんかいない。俺達は仲間じゃないか」

エルテノ 「仲間… けれど、私はアンドロイドなんです」

カノール 「そんな事は関係ない。それに君は海底都市で俺の命を救ってくれている。命の恩人じゃないか」

エルテノ 「それが私の役目ですから…」

カノール 「そんな役目なんか忘れてしまえ。君は人と同じ感情を持つ事だってできるんだ。笑ったり、泣いたりできる人間だ」

エルテノ 「カノール…」

ヴェルビマス暴走

ヴェルビマス制御ホールでは、ゲーリー教授が苛立ちを高めていた。

ゲーリー教授 「えーい、まだか! まだ、時空間転移に必要なエネルギーは得られんのか!」

バルキーニュ 「あと約 1100 秒必要です。Professor」

ゲーリー教授 「遅い! ヴェルビアスのエネルギー変換率を 95% まで上げろ」

バルキーニュ 「エネルギー変換率を 95% まで上昇させた場合、ヴェルビマスを制御しきれなくなる可能性があります。Professor」

ゲーリー教授 「うるさい! つべこべ言わずにさっさとやれ!」

バルキーニュ 「了解致しました。Professor」

ゲーリー教授 「いよいよだ。このわしが世界の支配者となる。愚民どもはすべて、このわしの偉大な力の前にひざまづくのだ!」

激しい振動が起こる。ヴェルビアスの制御が失われ始めていた。天空都市から強烈なプラズマがほとぼしり、プラズマにふれた全てのものを消滅させていった。やがて、ほとぼしるプラズマは天空都市レクサー全体を覆い始めた。

ヴェルビアスの暴走が始まった。船内が激しく揺れ始め、あちこちにプラズマが走る。オーパーはラーニアにヴェルビアスの暴走が始まった兆候だと警告し、天空都市そのものを消滅させるしか暴走を止める方法はないと告げる。

オーパー 「おい、そろそろやばくなってきたぞ。ヴェルビアスの制御が不完全になってきた。ここま放っておけば 1 万年前のヴェレアトールが再現される」

ラーニア 「大変、早くヴェルビアスを止めないきゃ!」

オーパー 「それは不可能だ。今から緊急停止させようとしても、間に合わない。方法はただ一つ、ヴェルビアスを利用してこの天空都市とラーカイアそのものを消滅させる」

カノール 「そんな事ができるのか!?!」

オーパー 「できるさ。ただし、ヴェルビアス制御ホールを占拠できればの話だがな」

カノール 「わかった。もう迷っている時間はない。ヴェルビアス制御ホールに突入だ!」

エルテノの死

ラーニア 「だめ! この扉のロックは頑丈だわ」

カノール 「まかせろ! 俺がふっとぼしてやる!」

カノールは武器で制御ホールの扉を破壊しようと試みるが、まるで歯がたたない。

ラーニア 「全然効いてないわ!」

カノール 「畜生! こんな所でゲーリーの野郎と心中なんて御免だ。他の侵入路を捜すんだ」

エルテノ 「待ってください! 私に考えがあります」

カノール 「なんだって」

エルテノ 「私の体内のエネルギーユニットの全エネルギーを解放して、この扉に集中させれば、きっとロック機構が過負荷に耐えかねて壊れるはずです」

カノール 「よせ! 君はまたつまらない義務感で、命を捨てるのか」

エルテノ 「いいえ、違います。今の私の気持ちは義務感などではありません」

エルテノはカノールを真っすぐに見つめて言う。

エルテノ 「アンドロイドの私を人間のように扱ってくれたあなたを救いたい。私を仲間と呼んでくれたあなたを…」

カノール 「やめるんだ!」

カノールを振りほどくようにエルテノは身を離し、扉の前に進み出る。エルテノの両手が扉の上に重ねられる。エルテノの全身を青白いスパークが覆い、それは徐々に両手に集中していく。

カノール 「エルテノ!」

エルテノ 「さようなら、カノール。私の大事な…」

エルテノと扉が白熱球に包まれる。白熱球が消え、溶けかかった扉はやがて、重々しい響きと共に開く。エルテノの姿はもうない。

最終対決

扉が開くと制御ホールの中から巨大なパワードスーツを身に付けたゲーリー教授が現れる。

カノール 「きつ、きさま!」

ゲーリー教授 「ヴェルビアスは、真に偉大なる科学者、このゲーリー教授のものだ! 誰にも渡さん、渡さんぞおお〜!」

カノール 「エルテノの行為を無駄にはしない! ヴェルビアスは絶対に止めてやる! 行くぞ、ラーニア、オーパー!」

ラーニア& オーパー 「OK!」

ヴェルビアスの暴走が進む中、最後の対決が始まる。

Ending

ゲーリー教授の最期

ゲーリー教授 「ば… 馬鹿な… このわしが… 天才科学者…、世界の支配者たるゲーリーが…」

火花を散らしていたゲーリー教授の右腕が爆発する。

ゲーリー教授 「ふ…ふふふふ…ふはははは…」

発狂したかのように笑い出したゲーリー教授は体を引きずるようにラーカイアを出ていく。その後を従僕ロボットバルキーニュが追う。

バルキーニュ 「Professor! ご命令を! Professor…」

ラーカイアの自爆セット

オーパー 「さあ、手遅れにならないうちに自動装置を設定するんだ。ヴェルビアスの全エネルギールートをレクサーの転換炉に接続すればレクサーとラーカイア、そしてヴェルビアスを時空間から消滅させることができる」

カノール 「どうすればいいんだ?」

オーパー 「簡単だ。そこのオレンジのボタンを押し、スロットに俺をセットするんだ。あとは俺が全部制御する」

スロットにオーパーをセットするカノール。オーパーの声はラーカイアのシステムを通して聞こえるようになる。

オーパー 「回路接続、確認完了」

カノール 「よし。いいぞ。ヴェルテバルムは?」

オーパー 「カウントダウンは3分だ。座標は設定しておくから、それまでにレクサーから脱出するんだな」

ラーニア 「ちょっと! それじゃオーパーはどうなるのよ!」

オーパー 「カウントダウン開始! 180…179…178…」

カノール 「… ラーニア。行こう!」

ラーニア 「だって… オーパーが… オーパー!」

オーパー 「173…172… ごきげんよう。ラーニア。170…」

涙をこらえるラーニア。

ラーニア 「… さようなら… オーパー…」

カノールと一緒に走り出すラーニア。

ヴェルテバルムによる脱出

ヴェルテバルムに飛び込んだ二人は転送台に立つ。すぐに二人は白い光に包まれ、ヴェルテバルムから消えて行く。

天空都市 Rexor の消滅

オーパー 「18...17... 行っちゃったか... 座標修正。動力バイパス回路 C-79 接続。まったくよくできてるぜ、“Lar Keior”は... カウンター補正... 0!」

銀色の天空都市が黒い球体に包まれ、歪曲した空間のエネルギーがその中の全ての物質を崩壊させていく。

やがて黒い球体は周囲の物質をわずかに引き込みながら、ゆっくりとそして急速に時空間の特異点に向けて収縮を始めていく。

激しい重力震が周囲を揺さぶり、爆縮が最高点に達した時... そこには何一つ残らない。

回想カット & スタッフロール

今までのビジュアルや追加の一枚絵で回想カットとスタッフロールを流す。んでもって、最後になぜか時空間を航行する“Lar Keior”とタイトルを出してめでたしめでたしと。